

中海圏域振興ビジョン

～ 出会いは なかうみ 動きだす 未来～



中海圏域のイメージキャラクター「ウンバくん」

平成22年3月

中海市長会

目次

はじめに.....	1
第1章 中海圏域振興ビジョンの目的.....	2
1．中海圏域の構成.....	2
2．中海圏域振興ビジョン策定の目的.....	2
3．中海圏域振興ビジョンの期間.....	2
第2章 中海圏域の現状と分析.....	3
1．各市町の特徴.....	3
(1) 米子市　～自然と人が共生するにぎわいのまち～.....	3
(2) 境港市　～さかなと鬼太郎のまち～.....	3
(3) 松江市　～水と緑、歴史と教育を大切にするまち～.....	4
(4) 安来市　～安来節と八ガネのまち～.....	4
(5) 東出雲町　～小さくてもキラリと光るまち～.....	4
2．中海圏域全体の特徴.....	5
(1) 自然・環境.....	5
(2) 交流の歴史.....	5
(3) 人口.....	6
(4) 生活.....	6
(5) 産業・観光.....	7
(6) 交通ネットワークおよび生活情報.....	10
3．圏域の現状分析に向けた意見聴取.....	11
(1) 意見聴取の方法.....	11
(2) 分野別にみた主な意見.....	11
4．圏域の現状分析.....	13
第3章 中海圏域発展の方向性と将来像.....	14
1．圏域発展を牽引する三つの方向性.....	14
2．圏域発展を支えるひとつの基盤.....	18
3．中海圏域の将来像.....	19
(1) 中海圏域がめざすべき進路（将来像にかえて）.....	19
(2) 将来像のまとめ.....	20
第4章 将来像の実現に向けて.....	21
1．三つの方向性を実現するために.....	21
2．ひとつの基盤を創り上げるために.....	26
第5章 中海市長会が担うべき役割.....	27
1．圏域発展を支える「ひとつの基盤」づくり.....	27
2．「三つの方向性」構築に向けたコーディネート.....	27
3．圏域の将来像実現に向けた進行管理.....	28

はじめに

我々の住むこの中海圏域には、ラムサール条約登録湿地である「中海・宍道湖」をはじめとする豊かな自然があり、また、日本神話の時代から連綿と続く歴史・文化も数多く残っています。さらに、こうした自然や文化を活かした産業や交流も盛んで、恵まれた生活環境や充実した都市機能を有する、山陰の中核的な都市圏として発展してきました。

また、米子空港-ソウル仁川空港間の国際定期便などに加え、平成 21 年 6 月には、境港市と韓国東海市、ロシアウラジオストク市を結ぶ国際定期貨客船が就航したことにより、今後は韓国、ロシア、さらにはシベリア鉄道を介して欧州を視野に入れた国際物流の拠点として、西日本のゲートウェイ（玄関口）となりうる高いポテンシャル（潜在力）を有しています。

こうした状況のもと、中海市長会では、できることから取り組みを進めるとともに、この圏域をどのように発展させていくための方策について、現状調査や分析によって検討・議論してきました。

その中で、中海圏域を総合的・一体的に発展させるためには、圏域の住民・NPO や各種団体、企業・行政など圏域で活動する各主体が連携して、共通の方向に向かって事業に取り組むことや、それを支える基盤の整備が重要であると考えました。そこで、中海圏域が一体的に発展していくための指針となる圏域の“将来像”を提案するため、中海圏域の振興ビジョンを策定しました。

中海市長会

会 長	松江市長	松浦	正敬
副会長	米子市長	野坂	康夫
	境港市長	中村	勝治
	安来市長	近藤	宏樹
	東出雲町長	鞆嶋	弘明

第1章 中海圏域振興ビジョンの目的

ここでは、本ビジョンで対象とする中海圏域の範囲および本ビジョン策定の目的について説明します。

1. 中海圏域の構成

本ビジョンでの中海圏域は、中海沿岸の米子市、境港市、松江市、安来市、東出雲町の4市1町で構成されるエリアです。

中海圏域の構成市町



2. 中海圏域振興ビジョン策定の目的

中海圏域が一体的に発展していくための指針となる圏域の“将来像”を提案するものです

(補足)

この中海圏域振興ビジョンは、圏域で活動する住民・NPO や各種団体、企業・行政などの各主体が、広域的な視点からみて共有すべき方向性や将来像を示すことを目的としています。したがって、この将来像は、行政だけを対象としたものではありません。また、中海市長会を構成する4市1町には、総合計画などがありますが、本ビジョンは、それらの計画と直接的な関係や位置づけはありません。

3. 中海圏域振興ビジョンの期間

一般的な振興計画等とは異なり、本ビジョンは圏域振興の方向性と将来像、検討すべき課題や事業を示すものであることから、ビジョンの期間は示さず、圏域を取り巻く環境変化や構成市町の基本計画等の動向を踏まえ、適宜必要な修正・補強を行うことで、その有効性を確保していきます。

第2章 中海圏域の現状と分析

ここでは、中海圏域の特徴について整理します。まず、圏域の4市1町ごとの特徴をまとめ、次に、統計資料等をもとに、圏域全体の特徴を整理します。また、本ビジョン策定にあたり、広域で活動する団体等に対し対面式、および郵送式で意見聴取した結果も本章で整理しました。

1. 各市町の特徴

(1) 米子市 ~自然と人が共生するにぎわいのまち~

米子市は、白砂青松の弓ヶ浜半島、中国地方随一の秀峰大山の四季折々の雄姿と山麓から湧出る名水に恵まれた自然豊かな土地であるとともに、明治時代からつづく鉄道網の拠点であり、現在でも米子自動車道、米子空港を擁する山陰の交通の要衝です。また、古くから山陰の商都と称される商業の町で、新しいものを積極的に受け入れる進取の気質にあふれ、交流により発展してきた、開放的で活気あふれる都市です。



(2) 境港市 ~さかなと鬼太郎のまち~

境港市は、カニの水揚げ日本一の「境漁港」のほか、国際定期コンテナ航路に加え、韓国、ロシアを結ぶ国際定期貨客船航路が開設された「重要港湾・境港^{さかいにう}」、韓国ソウルへの国際定期便が就航する「米子空港」といった海と空の港を有することから、中海圏域をはじめ西日本と海外を結ぶ交流拠点となっています。また、近年では、妖怪のブロンズ像が立ち並ぶ「水木しげるロード」が人気を集め、中海圏域屈指の観光地になっています。



(3) 松江市 ~水と緑、歴史と教育を大切にすまち~

松江市は、中海とともに宍道湖、日本海に囲まれた水の都であり、松江城を中心とする城下町の風情は、文豪小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の『知られぬ日本の面影』により、広く世界に紹介されています。また、京都・奈良と並ぶ「国際文化観光都市」でもあります。今なお、松江藩 7 代藩主松平不昧公から受け継がれる茶の湯の文化が市民生活に息づく、歴史と文化の薫り高い都市です。



(4) 安来市 ~安来節と八ガネのまち~

安来市は、古くから良質の砂鉄が採れ、製鉄が盛んに行われていました。現在も、その流れをくむ日立金属(株)安来工場があり、協力企業や取引先企業など金属関連製造業の集積があります。また、市の南部は中国山地に連なる豊かな緑に覆われ、市域を流れる飯梨川・伯太川両河川は優れた農地を育んでいます。さらに、安来節をはじめとする伝統芸能など、個性豊かで多彩な文化を有しています。



(5) 東出雲町 ~小さくてもキラリと光るまち~

『古事記』や『日本書紀』にも登場する舞台として、古い歴史や文化をもつまちで、近年では、宅地開発が進み、圏域内では唯一、人口が増加傾向にあります。町内には、農業機械生産高で日本第 4 位の三菱農機(株)の本社があり、企業城下町として、製造業の一定の集積があり、「ものづくりのまち」としての性格も持っています。



2 . 中海圏域全体の特徴

(1) 自然・環境

中海圏域には、中海・宍道湖や日本海、河川あるいは森林など豊かな自然があります。

このうち、中海圏域の中央にある中海は、国際的に重要な湿地として平成 17 年にラムサール条約に登録されており、住民の憩いの場や観光資源などとして親しまれる圏域の貴重な財産となっています。

しかしながら、周辺流域の社会経済活動の発展や生活様式の変化等に伴い水質が悪化してきたことから、平成元年に湖沼水質保全特別措置法に基づく指定湖沼とされ、これまで、20 年にわたる水質改善の取り組みが行われてきました。

また、圏域の北部にある「島根半島」は、大山隠岐国立公園の一部をなし、その中には神話にも登場する「加賀の潜戸」があります。さらに、安来市の清水寺を中心とする地区や鷺の湯温泉地区、富田城跡を中心とする月山地区からなる「清水月山」、松江市の嵩山地区や枕木山地区、朝日山地区からなる「宍道湖北山(東部地区)」という2つの県立自然公園もあります。

(2) 交流の歴史

中海圏域には、日本の国を産んだとされる夫婦神・伊邪那岐命(イザナギノミコト)と伊邪那美命(イザナミノミコト)にまつわる日本神話の舞台となる「黄泉比良坂(ヨモツヒラサカ)」、(東出雲町)の伝承が残っています。

また、奈良時代に編さんされた『出雲国風土記』の冒頭には、中海圏域が舞台となる「国引き神話」が描かれています。朝鮮半島や北陸地方の一部を引っぱってきたものが今の島根半島にあたるという壮大な物語です。この物語は、様々な文化や技術、あるいは人との交流があったことも表現しているといわれています。

このような交流の証しは、中海圏域にも数多く残っています。「妻木晩田遺跡」(米子市)や「塩津丘陵遺跡群」(安来市)などの遺跡からは、弥生時代の集落跡や四隅突出型墳丘墓などが発見されているほか、淀江平野にはラグーン(潟)があり、淀江潟に面した「稲吉角田遺跡」(米子市)からは、船舶、望楼・祠、倉庫群など潟沿岸の景観を描いたとみられる土器が発見されており、海上交易の要衝地として発展していたとみられます。また、「上淀廃寺跡」(米子市)からは、奈良法隆寺の壁画と並ぶ日本最古級の彩色仏教壁画も出土しています。

このように中海圏域と北東アジアとの交流の歴史が、『古事記』、『日本書紀』の日本神話として明らかになっています。



黄泉比良坂(ヨモツヒラサカ)

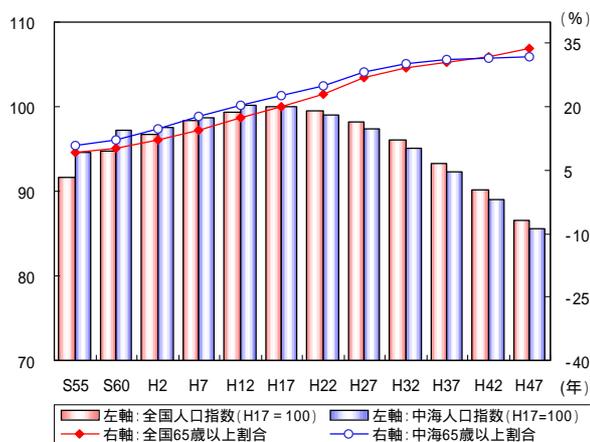
(3) 人口

中海圏域の人口は約 44 万人（「平成 17 年国勢調査」）で、山陰両県の約 3 割を占めています。また、本州の日本海沿岸の都市の中では、新潟市（約 79 万人）、金沢市（約 45 万人）に次ぐ人口の集積地です。

これまで、中海圏域の人口は総じて増加傾向にありましたが、平成 12 年をピークに減少に転じ、平成 17 年の約 44 万人から 30 年後の平成 47 年には、約 37 万人まで減少すると推計されています。

また、圏域全体の 65 歳以上人口の割合も、平成 17 年の 22.7% から 30 年後の平成 47 年には 33.8% となり、高齢化が急速に進むと推計されています。

人口と高齢者人口割合の推移



出典：総務省「国勢調査」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の都道府県別将来推計人口」

(4) 生活

生活圏

中海圏域周辺の通勤・通学や買物の状況を見ると、高等教育機関や高等学校、百貨店や大型ショッピングセンターなどが集積している米子市、松江市への流れが大きくなっており、圏域の市町はもとより周辺市町村からの人の流れも集中しています。このように、中海圏域では、日常生活の場での人の移動・交流が活発になっており、県境や市町村界を越えた広域の生活圏が形成されています。

しかしながら、県境や市町村界による“壁”を感じる場面があることも事実です。今後は、広域化した生活圏にあわせた社会基盤や制度を一層充実していくことが必要です。

医療機関

中海圏域の人口 10 万人あたりの病院病床数は 1688.8 床、医師数は 338.1 人で、鳥取県や島根県あるいは全国と比べて高い水準にあります。このことから、圏域の医療体制は比較的充実しているといえます。

しかしながら、圏域内を市町別にみると、人口 10 万人あたりの病床数や医師数に大きな差があるため、圏域内での病院相互の連携やネットワークを強化する

病院病床数および医師数等（平成 20 年）

	人口 10 万人あたり 病院病床数	人口 10 万人あたり 医師数
米子市	1903.3	543.5
境港市	754.3	186.5
松江市	1817.4	270.1
安来市	1704.0	157.4
東出雲町	-	63.0
中海圏域	1688.8	338.1
鳥取県	1499.8	281.9
島根県	1585.0	257.5
全国	1260.4	224.4

人口は「平成 17 年国勢調査」の数字を利用しました。
出典：厚生労働省「医師・歯科医師・薬剤師調査」、
厚生労働省「医療施設調査」、総務省「国勢調査」

必要があります。

なお、圏域の救急医療体制をみると、鳥取大学医学部附属病院と松江赤十字病院の2つの三次救急病院と、13の二次医療救急病院があります。

福祉施設

中海圏域における社会福祉施設数は280施設あり、山陰両県の約3割を占め、圏域の人口同様に社会福祉施設の集積が進んでいます。また、人口10万人あたりの社会福祉施設数も63.5施設で、これも全国平均を上回っています。

しかしながら、中海圏域の施設利用率は平均100%を超えており、一部では待機者が発生するなどの課題があります。

高等教育機関

中海圏域には、鳥根大学松江キャンパスや、鳥根県立大学短期大学部(松江キャンパス)、鳥取大学医学部、米子と松江の工業高等専門学校、さらに多くの専門学校などがあり、山陰の他地域と比べ高等教育機関が集積し、若者が多く集まっています。しかしながら、卒業後に就職する人の3分の2程度は県外に出ており、魅力ある産業の育成と雇用促進が課題となっています。

また、大学や高専は、産学官連携を企画・推進していくための窓口を設置していますが、最近5年間の共同研究の実施件数をみると、全国的には増えているものの中海圏域では伸び悩んでいます。今後、地域産業の発展を図る上でも、産学官連携が活発になることが期待されます。

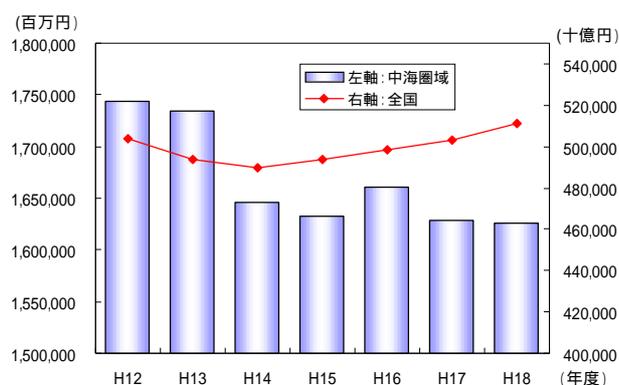
(5) 産業・観光

経済動向

中海圏域4市1町の市町村内総生産の合計は1兆6254億円(平成18年度)で、山陰両県の約35.8%を占めています。これは、中海圏域が山陰両県に占める人口の割合(32.8%)よりも高くなっており、多くの産業が集積しているといえます。

しかしながら、市町村内総生産は、平成12年度の1兆7432億円から平成18年度は1兆6254億円に減少し、事業所数についても、平成8年の25,125事業所から平成18年には22,447事業所と、この10年間で2,677事業所が減少しており、経済は停滞気味であるといえます。

市町村内総生産の推移(名目)



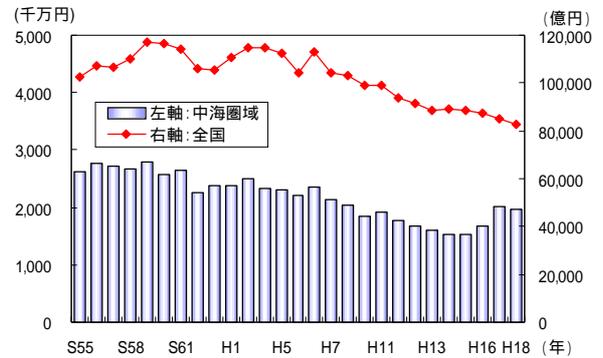
全国は国内総生産(実数)を使用しています。
出典：鳥取県「平成18年度鳥取県市町村経済計算」、
鳥根県「しまねの市町村経済計算(平成18年)」

農林水産業

平成 18 年の中海圏域の農業産出額は 2,024 億円で、長期的な推移をみると減少傾向にあります。また、水産業は、日本有数の水揚げを誇る境漁港を中心に非常に盛んですが、境漁港の漁獲水揚量の推移をみると、平成 5 年をピークに下降しています。

市町別にみると、米子市の白ねぎ、境港市の水産物、松江市のしじみ、安来市のタケノコ、東出雲町の干し柿など、4 市 1 町それぞれに特色ある農林水産品があります。

農業産出額の推移



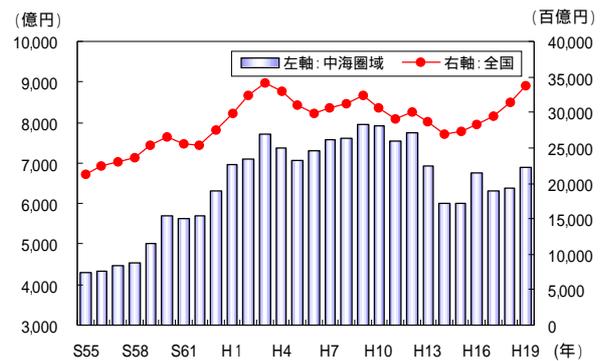
出典：農林水産省「生産農業所得統計」

製造業

中海圏域の製造品出荷額は、平成 9 年の 7,943 億円をピークに減少に転じ、平成 14 年頃からはやや持ち直してきたものの、停滞気味に推移しています。圏域内には、安来市の鉄鋼業、東出雲町の一般機械器具製造業、米子市や境港市の食料品製造業など、一定の集積がみられます。

しかしながら、圏域全体でみると、製造品出荷額は停滞気味で、従業者 1 人あたりの粗付加価値額（労働生産性）は、全国平均より低くなっています。

製造品出荷額の推移



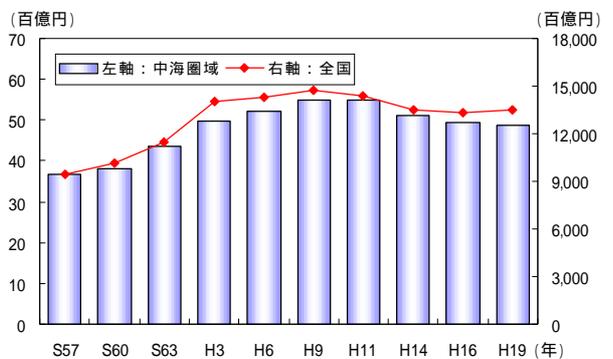
出典：経済産業省「工業統計調査」

商業

小売業の年間商品販売額の推移をみると、平成 9 年をピークに減少し、近年は停滞傾向にあります。小売業売場面積は、大型店舗の進出等の影響により、拡大傾向にあります。

圏域内では、人口規模の大きい松江市や米子市の販売額が多くなっており、特に、米子市は小売吸引力が 1.26 と最も大きく、中海圏域の商圈の中心的な都市といえます。

小売業年間商品販売額の推移



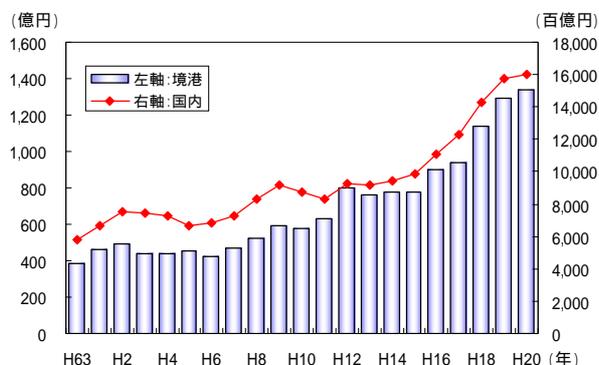
出典：経済産業省「商業統計」

貿易

圏域内には重要港湾の境港^{さかいこう}があり、中国や韓国に向け国際定期コンテナ船が就航していることから外国貿易の拠点となっており、境港^{さかいこう}の貿易額は増加傾向にあります。

しかしながら、境港^{さかいこう}の外貿コンテナ貨物取扱量をみると、平成 19 年時点で日本海側の港湾で 6 位ではあるものの、1 位の新潟港の約 8 分の 1 以下に留まっており、さらなる拡大に向けた取り組みが必要です。

境港の貿易額（輸出 + 輸入）の推移



出典：財務省「貿易統計」

観光

中海圏域には、江戸時代の城下町の面影や茶の文化が残る松江市や妖怪をモチーフにした「水木しげるロード」（境港市）あるいは皆生温泉や玉造温泉などの観光地が多数あり、観光業は、圏域の主要な産業となっています。

中海圏域（松江エリア、境港エリア、米子エリア、安来エリア）の平成 19 年の観光消費額はおよそ 773 億円であり、松江エリアと境港エリアでの消費額が多いといえます。

中海圏域の観光消費額（平成 19 年）



米子エリアは、淀江町の一部を除き、日吉津村を含んでいます。
出典：鳥取県「鳥取県観光入込動態調査結果」、
島根県「島根県観光動態調査結果」

農業産出額

…農産物の生産量から中間生産物（種子、飼料など）を除いた最終生産物の総生産額のことです。
なお、以前は「農業粗生産額」との名称でしたが、平成 13 年より「農業産出額」に変更されました。

小売吸引力

…地域が外部からどれだけの購買力を吸引しているかを示す指標です。山陰両県の平均を 1 とし、1 を上回る場合は市町外からの買物客を引き付けていることを表します。

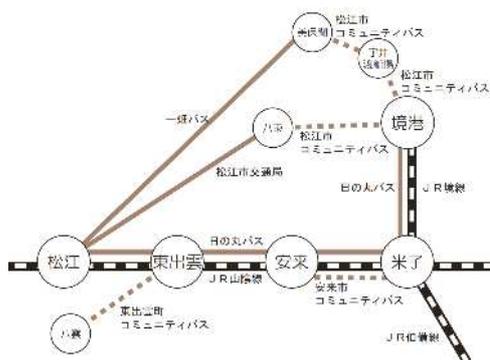
(6) 交通ネットワークおよび生活情報

交通ネットワーク

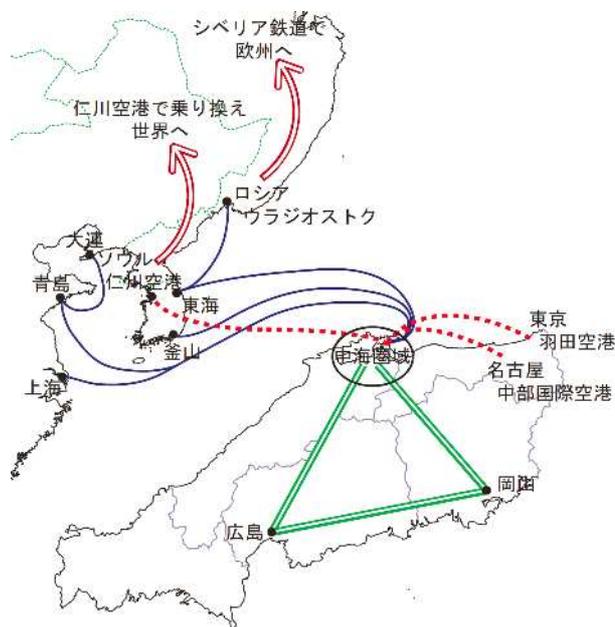
中海圏域内では、JRや路線バスなどの公共交通機関や国道、高速道路などの道路網の整備が進んでおり、おおむね都市間を結ぶネットワークが形成されています。また、国内の他都市とは、米子空港発着の空路やJR、高速道路などの陸路で結ばれています。一方、海外とは、^{きかいこう}境港からの国際定期コンテナ航路や国際定期貨客船航路、米子空港からの国際航空路線など、北東アジア地域につながるネットワークがあります。

しかしながら、県境を結ぶ道路や境港～松江間の公共交通機関など、一部の地域で整備が不十分な箇所があるほか、圏域内外を結ぶ高速道路や高速道路と重要港湾を結ぶ道路などを整備する必要があります。

中海圏域の公共交通体系
(市町界を越えるもの)



中海圏域外とのネットワーク



上図は、あくまでイメージ図ですので、航路等が実際とは異なっている箇所があります。

生活情報

中海圏域では、暮らしに役立つ情報から経済、観光、行政の動きなど地域の様々な情報が提供されています。特にケーブルテレビは、各市町のきめ細かな情報を発信しており、貴重な情報源といえます。現在、安来市と東出雲町でケーブルテレビの整備が予定されており、この整備が完了すれば4市1町全てでケーブルテレビの受信が可能となります。

しかしながら、行政の広報や地元新聞、ケーブルテレビなど情報取得源が県や市町ごとに異なるため、圏域内の情報の共有化が進んでいないのが現状です。

3 . 圏域の現状分析に向けた意見聴取

(1) 意見聴取の方法

本ビジョンの策定にあたり、中海圏域で広域に活動する商工団体、観光団体、その他諸団体から対面式で調査（以下、ヒアリング）および郵送式での調査（以下、アンケート）を次のように実施し、意見をまとめました。

この他にも、4市1町からなる部会、担当部門での調整整理、パブリックコメントなどを実施し、必要な意見聴取を行いました。

《調査要領》

・ヒアリング

実施期間：平成 21 年 9 月 10 日～10 月 15 日

実施団体数：27 団体

・アンケート

実施期間：平成 21 年 9 月 17 日～10 月 13 日

実施団体数：61 団体、うち回答数：33 団体

(2) 分野別にみた主な意見

自然・環境

自然・環境分野については、「豊かな自然」を活用すべきという意見が多くあり、中でも「ラムサール条約登録湿地」である中海を柱に、産学官の連携による技術開発、観光振興などへの取り組みを後押しする声がありました。

また、自然を保全すべきという意見が多く、中海の環境保全や、里山の整備・保全における連携の必要性に関する意見がありました。また、子どもたちに対する環境教育の一体化が必要といった意見もありました。

生活

生活分野については、住民の行動範囲はすでに圏域全体に広がっているといった意見がありました。ただ、地域の歴史・文化の浸透や、郷土への愛着が住民に不足していると指摘する意見もありました。

また、生活に関連して、医療体制に関する意見も多く出されました。例えば、市町界を越えた医療の連携への要望や、医師不足に対する不安といった意見がありました。

産業・観光

産業分野については、水の浄化技術やヤスキハガネ といった圏域独自の技術を活かした新ビジネスの開拓に期待が寄せられました。また、自然・文化資源や境港^{きかいこう}を活かした産業振興も課題として多くあがりました。他方、大学などの高等教育機関を卒業した若手人材

の圏外への流出が問題としてあがりました。

観光に関する意見も多く出されました。圏域には、松江城周辺や足立美術館、水木しげるロードなど、若者、家族連れ、年配の方、また外国人など、様々な客層が楽しめるスポットがあり、集客力が高いということにはほとんど異論ありませんでした。ただ、圏域内の情報提供や、外国人観光客への対応などに課題があるといった意見もありました。

交通ネットワーク・生活情報

交通・情報については、圏域内の道路、特に中海を周遊する道路整備の遅れや、公共交通や二次交通の利便性の悪さについての指摘が多数ありました。

また、県境などによって情報が途切れてしまうといった問題も指摘されており、圏域内の情報の共有化も課題としてあがりました。

広域連携

広域連携分野については、行政区域が違うことによる弊害や圏域内の諸団体の活動内容に重複がみられるという指摘が多数ありました。

また、圏域での共通の取り組みの実施やスポーツを活かした連携など、今後、連携を進めていくための意見もありました。

中海市長会に対する意見・要望

中海市町会の活動内容に対しては、圏域住民へのPR不足や民間団体の連携促進などが課題であるとの意見がありました。

ヤスキハガネ

...たたら製鉄の技術を受け継ぐ日立金属(株)安来工場が製造する高級特殊鋼。

4. 圏域の現状分析

(広域で活動する団体等へのヒアリングや統計などから中海圏域の内部環境と、外部環境を整理したもの)

	強み	弱み	
内部環境	<p>自然・環境</p> <ul style="list-style-type: none"> ラムサール条約登録湿地「中海・宍道湖」、日本海、河川などの豊かな水資源がある 大山、島根半島など風光明媚な自然がある <p>交流の歴史</p> <ul style="list-style-type: none"> 古代から続く豊富で特色のある歴史・文化がある <p>人口</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本海側地域でも有数の人口集積がある <p>生活</p> <ul style="list-style-type: none"> 住民の通勤・通学や買物などの生活行動は、行政界を越えている 住民の暮らしに対する満足度が高い <p>産業・観光</p> <ul style="list-style-type: none"> IT産業、環境産業などにも対応できる、ヤスキハガネ、Ruby、氷温技術など世界に誇る技術がある 水の浄化技術研究など産学官が連携した取り組みが進んでいる 鳥取大学医学部や島根大学、また米子・松江に工業高等専門学校を有し、優秀な人材を育成している バラエティに富んだ農水産品がある <p>交通ネットワーク・生活情報</p> <ul style="list-style-type: none"> 米子空港(米子-ソウル便)、境港(コンテナ貨物:中国・上海、青島、大連、韓国・釜山 貨客船:境港-韓国・東海-ロシア・ウラジオストク)といった、海外貿易・交流の窓口がある <p>広域連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 「中海市長会」が設立され、環境保全、観光促進など連携に向けた動きが始まっている 各市町が自然・文化・産業などで独自の特色を持っており、圏域全体でみるとバランスが取れている 行政、経済団体、観光団体の連携組織がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 地元企業やNPO法人などの自然に対する認識の高さと環境改善に向けた取り組みが進んでいる 圏域全体では医師の数が多し 自治会活動など地域コミュニティの結びつきが強い 各市町の特色ある産業が集積している。 多様な伝統工芸品がある 広域的な視野に基づく各観光団体等の活動が多岐にわたり活発である 様々な国の人、世代が楽しめる多様な観光地がある 温泉が豊富にある 地理的に北東アジアと近接している 境港、米子空港、(出雲空港) JR、高速道路など経済活動に必要なインフラが整備されており、結節点となっている 広域連携を目的に設立された団体の活動が活発である(例:山陰文化観光圏協議会) 「ガイナーレ鳥取」(サッカー)、「島根スサノオマジック」(バスケットボール)といったプロスポーツチームの設立 	<p>自然・環境</p> <ul style="list-style-type: none"> 住民の「中海」への関心に市町間で差がある <p>交流の歴史</p> <ul style="list-style-type: none"> 住民が圏域の歴史、文化、魅力を十分に知らない <p>人口</p> <ul style="list-style-type: none"> 人口減少・高齢社会が進展している 大学進学等を機会に人材が流出している <p>生活</p> <ul style="list-style-type: none"> 耕作放棄地、高齢化・過疎化などの中山間地域問題を抱えている 医師の偏在 各市町の都市機能にばらつきがある 保育所が不足している 子どもに対して、ふるさとの素晴らしさや就業観を教える機会が不足している <p>産業・観光</p> <ul style="list-style-type: none"> 事業所数が減少傾向にある 製造品出荷額が低迷している 外国人観光客への対応が不十分 企業情報、就職情報等を発信する窓口が各行政単位で設置されており、統一した窓口がない 都市圏と比べて雇用条件に魅力がない 高等教育機関を卒業した若者がやりたいことや学んできた分野を活かせる雇用の場が少ない 地元港湾を利用した貿易に対する理解が進んでいない。 観光分野は、様々な活動主体の活動内容が重複し、効率的な活動ができていない。 <p>交通ネットワーク・生活情報</p> <ul style="list-style-type: none"> 行政の広報や、新聞、CATVなど情報取得源が県や市町ごとに異なるため、圏域内の情報を共有できない 圏域内の公共交通や二次交通の利便性が悪い。 圏域外へのアクセスに時間がかかる 自動車がないと買物に不便 観光客の交通利便性が悪い <p>広域連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 圏域のまとまりが悪く、地域資源を活かすための行動力に欠ける 行政施策や制度に違いがある 将来的には、市町ごとに生活・産業支援などを全て揃えて提供することは難しい 諸団体の活動内容が重複しており、情報交換の機会もない 市町界によって諸団体の活動範囲が分断されている。 県境、市町界があり、地域全体のポテンシャルを十分に発揮できない 行政の縦割意識、リーダーシップ不足、行政間で重視する内容に温度差がある 中海で連携する意義が周知されていない 圏域の全体像がつかめる基礎的な統計資料が乏しい 住民レベルでの圏域の一体感が醸成されていない。 様々な都市機能の偏在や重複がある。
外部環境	<p style="text-align: center;">機会</p> <p>国際化</p> <ul style="list-style-type: none"> 北東アジアをはじめとするアジアの多くの地域が発展しており、商機を掴む機会がある。 外国人の日本への関心の高まり 国土形成計画による「シームレスアジア」と北東アジアゲートウェイ構想が推進されている <p>観光</p> <ul style="list-style-type: none"> 政府が外国人観光客誘致活動を促進している。 高速道路の割引 <p>環境</p> <ul style="list-style-type: none"> 環境への関心の高まり 	<p>情報化社会</p> <ul style="list-style-type: none"> インターネット等の情報インフラ整備による情報網の発展 <p>地方制度</p> <ul style="list-style-type: none"> 地方分権の推進 広域連携に対する期待の高まり 「定住自立圏構想」という新しい制度の導入 <p>人材</p> <ul style="list-style-type: none"> 求職者の地元志向 	<p style="text-align: center;">脅威</p> <p>人口</p> <ul style="list-style-type: none"> 我が国全体が人口減少・高齢社会に入っている。 <p>産業</p> <ul style="list-style-type: none"> 国内経済に停滞傾向がみられる 製造業の北東アジア諸国との技術・価格競争がはじまっている <p>国際化</p> <ul style="list-style-type: none"> 北東アジアのゲートウェイとしての地域間競争の激化 <p>観光</p> <ul style="list-style-type: none"> 観光客の誘致競争が激化している <p>人材</p> <ul style="list-style-type: none"> 少子化による将来的な労働力の不足が見込まれる

第3章 中海圏域発展の方向性と将来像

ここでは、中海圏域の特性を、内部環境における「強み」、「弱み」、外部環境における「機会」、「脅威」に分類・整理する中で浮かび上がってくる圏域発展の「方向性」と発展を支える「基盤」を明らかにし、そのうえで、この圏域の将来像を示していきます。

なお、将来像を検討するにあたり、以下の三つの視点が重要だと考えました。

圏域の持つ強み、とりわけ他の都市、他の圏域に存在しない魅力、優位性を国内外に最大限アピールし、その存在感を強く示していくことにより、「地域主権」や「道州制」などの議論や時代の要請の中で埋没することなく、この圏域の持続的な発展につないでいきます。

構成市町が自治体として行なっている固有の事務事業については、それぞれの特徴・個性を活かした役割分担により、圏域の活性化を図るとともに、圏域全体としての取り組みについては、重複や錯綜（さくそう）を排除し、屋上屋（おくじょうおく）とならないよう留意していきます。

圏域内の住民はもとより、事業者、団体等に判りやすく、かつ取り組みへの理解・共感が得られやすいものとしていくために、総花的な取り組みではなく、中海圏域が一体として取り組まなければ実現できないもの、一体として取り組むことに価値があるものを精選し取り組みます。

錯綜 = いらまじること
屋上屋 = むだなことのたとえ

1 . 圏域発展を牽引する三つの方向性

圏域の持つ優位性を最大限活用し、他都市、他圏域にない魅力・個性を国内外に発信・際立たせるためには、圏域に暮らす住民、活動する事業者、団体等の理解・共感が得られるシンボリックな取り組みが必要です。

同時に将来に渡って持続することが可能で圏域を取り巻く環境変化に柔軟に対応するとともに、関連する産業や事業、住民参加などへの波及効果や裾野の広がりにつながる取り組みとしていくことが期待されています。

圏域発展を牽引する強力な推進力を持った「エンジン」に例えられる「三つの方向性」を示します。

北東アジアから世界へつながる西日本のゲートウェイの構築 ~なかうみで出会う~
中海をはじめとする豊かな自然と人が織りなす調和の実現 ~なかうみを守る~
自然・人材・技術の連携による世界に誇る中海ブランドの創出 ~なかうみで創る~

北東アジアから世界へつながる西日本のゲートウェイの構築 ～なかうみで出会う～

中海圏域は、高速道路（山陰道、米子自動車道）や鉄道（JR 山陰線、伯備線）、飛行機（米子空港発着の東京便、名古屋便）などにより、国内の他地域と山陰を結ぶ交通の結節点となっています。

また、中海圏域は、北東アジアに近接しており、境港とロシアのウラジオストク・韓国の東海や釜山・中国の上海や青島、大連を結ぶ国際航路、米子空港と韓国仁川空港を結ぶ国際航空路線によって北東アジアとつながっているという強みがあります。さらには、北東アジアにあるハブ港、ハブ空港あるいはシベリア鉄道を介して、広く世界とつながっています。

近年、中国をはじめとする北東アジア諸国は著しい経済成長を遂げており、日本とのヒト・モノ・カネの流動は拡大していることから、国内・海外へのネットワークがあるという圏域の強み（優位性）を活かし、国内他地域および北東アジアとの交流・連携を促進することが、中海圏域の発展につながります。



DBS クルーズフェリー



アシアナ航空

中海をはじめとする豊かな自然と人が織りなす調和の実現
～なかうみを守る～

中海圏域には、斐伊川流域の汽水域である中海・宍道湖をはじめ、日本海や河川、森林など豊かな自然があります。特に中海は、平成 17 年にラムサール条約に登録され、「国際的な資源」として位置づけられており、沿岸の 4 市 1 町や鳥取・島根両県、国をはじめとする関係機関、NPO、住民団体などが連携し、自然環境を保全しつつ、中海から得られる恵みを賢く利用（ワイズユース）する継続的な取り組みが展開されています。

中海圏域の生活環境を一層改善し、同時に圏域の持つ魅力を高め、国内外に強くアピールしていくためには、こうした取り組みを拡充させ、圏域の強みである豊かな自然を守り、後世に残していく必要があります。



自然・人材・技術の連携による世界に誇る中海ブランドの創出
～なかうみで創る～

中海圏域の4市1町には、特色ある産業集積や技術(米子の氷温技術、境港の水産業、松江市のボタン・Ruby、安来市のヤスキハガネ、東出雲町の農機具製造など)、豊富な地域資源(中海をはじめとする豊かな自然や景観、温泉などの観光資源、圏域に残る歴史や文化など)、人材(圏域内の大学・研究施設など)など、圏域固有の強みがあります。

こうした強みを活かし、圏域を一体と捉えた産業振興を図ることで、停滞している地域経済を活発にする必要があります。



氷温技術

…摂氏0 以下でも凍らずに食品が生き続ける温度域を「氷温」といい、この氷温域で食品の貯蔵や加工を行うことを「氷温技術」といいます。氷温技術には、高鮮度保持化・高品質化・有害微生物の減少化などの効果があります。

ボタン

…松江市八束町では、ボタンの苗木の生産量が全国一の産地となっています。また、国内や海外にも輸出されています。

Ruby

…松江市在住のまつもとゆきひろ氏によって作られたプログラミング言語の名称です。手軽さと高機能さを併せ持つ言語で、世界中の多くのプログラマから支持されています。

2 . 圏域発展を支えるひとつの基盤

「三つの方向性」を踏まえて、圏域が一体的に発展していくためには、それを支える基盤を整備することが重要です。

圏域内での交通、物流、情報の一体化、圏域外への発信によるネットワークを構築するとともに、住民、事業者、団体等が交流し、圏域の構成員としての一体感や目的意識の共有を進めていくための効果的なハード整備、ソフト面での多様な取り組みを進めることが必要となります。

「三つの方向性」を「エンジン」に例えれば、それを設置するための「プラットフォーム」に例えられる県境や圏域構成市町の区域を越えた「ひとつの基盤」を整備します。

4市1町がつながり、あたかもひとつのように機能するまち ～なかうみをつなげる～

中海圏域は県境があり、交通が不便である、情報交流が不十分であるなどが課題であると指摘されています。こうした圏域の弱みは、連携を促進する上で、大きな支障となっています。したがって、三つの方向性を実現するには、連携の基盤となる圏域内のネットワークを、ハード・ソフトの両面から強固にする必要があります。

ハード面では、江島大橋や山陰道などの社会基盤の整備がこれまでも行われてきましたが、圏域と他都市とを結ぶ高速道路や圏域内の道路網など、他地域よりも遅れているものもあります。そこで、中海圏域の将来に必要な社会基盤の充実が必要です。

また、中海圏域に住む人々の生活や経済活動は、市町の枠を越えて行われていますが、圏域には、まだまだ目に見えない「壁」のようなものも感じられるとの意見も多いことから、圏域内の人々の交流や情報交換・一体となって取り組めるイベントや行事などを通じて、ソフト面での連携の強化と相互補完に取り組み、圏域の一体感の醸成を図ることが必要です。



プラットフォーム

...アプリケーションソフト等を動作させるための基盤となる OS など。

転じて、上部に設置する様々なものを下から広く大きく支えるものをさす用語として定義される。

3 . 中海圏域の将来像

圏域を構成する4市1町には、それぞれ総合計画等があり、各市町ごとの施策を行い、地域の発展を図っています。こうした動きに加え、前章で示した中海圏域発展を強く牽引する方向性、圏域発展を幅広く支える基盤を踏まえ、中海圏域がめざすべき進路としての将来像を明らかにしていく必要があります。

その意味で、「ひとつの基盤」の上で展開する「三つの方向性」を相互に関連づけ、あたかも全体が一つのシステムとして稼働させていくことそれ自体が、圏域の将来像をかたちづくるものと考えます。

(1) 中海圏域がめざすべき進路(将来像にかえて)

まず、「西日本のゲートウェイの構築」を通じて中海圏域が発展著しい北東アジアをはじめ世界とつながることで、「中海ブランドの創出」も世界的な広がりの中で開発・技術革新や新産業の創出、流通、販売に結びつけていくことが可能となります。

また、その結果としてもたらされる競争力、知名度などブランド力のグレードアップがゲートウェイを一層魅力あるものとし、それを流れる人、物、情報の量と速度、質を増大、加速、向上させていきます。

一方、「豊かな自然と人が織りなす調和の実現」を図り、中海をはじめ貴重で魅力に富んだ自然環境を維持保全していくことが、国内はもとより世界的なこの圏域に対する認知度、イメージアップに結びつきます。

同時に、未来への遺産として、私たちの次の世代へと引き継いでいくことにより、この圏域が有するゲートウェイやブランドの将来に渡る存在価値を高めていくことにつながります。

そして、三つの方向性が相互に関連し、それぞれの機能や役割を補完し、増幅しあうことで、中海圏域発展のスパイラル(好循環)を生み出していく基盤として、道路・交通・情報網等のハード整備、事前環境保全の活動等に代表されるソフト面での取り組みによる「あたかもひとつのまちのように機能するまち」を創りあげていくことが求められています。

(2) 将来像のまとめ

上述の一連の取り組みにより示される中海圏域がめざすべき進路を「人、物、情報が世界に向けて行きかい、産業や暮らしに活気がみなぎり、かけがえのない自然を未来へ継承する中海圏域」としてまとめることができます。

さらに、本ビジョンでは、圏域振興・発展にむけた様々な取り組みを進めていくうえで、この圏域の将来像を「出会いは なかうみ 動きだす 未来」と表現することとしました。

出会いは なかうみ 動きだす 未来

中海圏域は、日本神話の時代より、圏域の豊かな自然を享受するとともに、圏域内だけでなく国内・対岸諸国との交流を通して新しい文化と技術を創造し、発展してきました。「出会いは なかうみ 動きだす 未来」という言葉には、これまで様々な「出会い」によって夢が実現してきたように、圏域が一体となって実現する新たな中海圏域の夢も、新しい「出会い」を通じて実現させたい、という思いをこめました。

現在の出会いもこれからの出会いも、全ては新しい未来へとつながっていきます。中海圏域に集う全ての人々の「出会い」が、新しい交流の促進、新しい産業の育成という未来を動かすステージを次々に生みだしていきます。



第4章 将来像の実現に向けて

中海圏域がめざす将来像を実現していくためには、具体的な個々の課題や事業に取り組み、創り上げていく必要があります。

本章では、圏域発展を牽引する三つの方向性とその発展を支えるひとつの基盤を構築していくために、当面、圏域が一体となって取り組むべき課題や事業として考えられるものを例示します。

前章で例えたエンジン（方向性）やプラットフォーム（基盤）を組み立て、創り上げていくためのパーツ（構成要素・部品）に例えられるものといえます。

具体的には、効果的で実現可能なものから、一つひとつ着実に取り組んで行くことが重要です。

1. 三つの方向性を実現するために

北東アジアから世界へつながる西日本のゲートウェイの構築
～なかうみで出会う～

課題・事業

国際交流の促進

- ・北東アジアとの様々な交流 を中海圏域の資源と捉え、圏域全体で支援・拡充。
- ・商談会や中海圏域内企業の海外進出など経済活動のサポート及び促進。
- ・北東アジアとのネットワークを強固にするための人材の誘致・育成。
- ・市民の国際理解の促進など外国人の受入体制の充実。
- ・外国人が住みやすい多文化共生社会の構築。

きかいこう 境港・米子空港の機能強化

- ・国際定期コンテナ船（中国航路・韓国航路）や国際定期貨客船などに対応した物流センター機能の充実。
- ・山陰道や尾道松江線などの高速道路をはじめとするアクセスの整備。
- ・境港及び米子空港の国際化の進展に向けた CIQ 体制 の充実・強化。
- ・国際旅客ターミナルやリサイクル物資など多目的な貨物に対応するための港湾整備。
- ・北東アジアと結ばれている「海の道」と「空の道」を活かした物流体制の構築。

境港・米子空港の利用促進

- ・ 中海圏域のみならず、西日本全域からの集荷による貨物取扱量の増加。
- ・ 釜山・上海への国際定期コンテナ船の直行便の就航及び新規航路の開設・国際定期コンテナ船、国際定期貨客船の利用促進。
- ・ 中海圏域や両県の官民が一体となったポートセールスの拡充。
- ・ 総合静脈物流拠点港（リサイクルポート）としてリサイクル貨物量の増加。
- ・ 航空需要の高まりに伴う既存の定期路線の利用増及び定期便の拡充。
- ・ 米子空港の滑走路 2500m 延伸を活かした世界の各都市を結ぶチャーター便の運航・定期便化。
- ・ ローコストキャリア（LCC、低コスト航空会社）などによる米子空港と北東アジアのローカル空港間のネットワークの構築。

北東アジアとの様々な交流

…中海圏域の4市は、北東アジア諸国の都市と友好都市提携が結ばれています。

また、これ以外にも、文化、経済交流をはじめ青少年のスポーツ交流、さらには大学、研究機関による学术交流など、様々な国際交流が行われています。

< 4市の友好都市（北東アジアの都市のみ） >

米子市：韓国 高城郡、束草市、中国 保定市

境港市：中国 琿春市

松江市：韓国 晋州市、中国 吉林市、杭州市、銀川市

安来市：韓国 密陽市

CIQ 体制

…CIQ は税関(Customs)、出入国管理(Immigration)、検疫(Quarantine)の略で、国境を越える際に必要な手続きのことです。

「海の道」と「空の道」を活かした物流体制

…米子空港と境港が近接していることを活かすことで、目的に応じた使い分けができ、利用者の利便性向上が見込まれます。また、空港・港湾が一体となった物流拠点の形成することで、物流機能の集積・効率化が期待できます。

ローコストキャリア（LCC）

…運用効率性の向上やサービスの簡素化などによって格安運賃で航空輸送サービスを提供する航空会社のことです。欧米などLCC先進地では、主要空港ではなく、セカンダリー空港（大都市周辺の比較的混雑していない中小空港）や地方空港を利用することが多くなっており、日本の地方空港でも活性化策のひとつとして期待されています。

中海をはじめとする豊かな自然と人が織りなす調和の実現
～ なかうみを守る ～

課題・事業

豊かな自然の保全・活用

- ・ 中海の浄化をめざした「中海アダプトプログラム」など、圏域内にある自然の保全活動の支援、さらなる拡大。
- ・ 中海を活用したポート・ヨットレースの開催や中海遊覧船の就航など、豊かな自然を活用し、住民同士の交流や圏域の発展に役立つイベントや事業の実施。
- ・ 上流での植林事業など河川流域を一体的に捉えた水資源の保全活動の実施。
- ・ 中海圏域の生態系の管理や鳥獣保護の推進。

自然と調和した社会の構築

- ・ 松江市の「リサイクル都市日本一」をスローガンに掲げた環境政策などの動きを圏域全体へ拡大。廃棄物の発生抑制・再使用・再生利用と適正処分の推進。環境教育の充実。
- ・ 企業活動における、グリーン購入やモーダルシフトの導入など環境重視の取り組みの促進。
- ・ 中海圏域における排出量取引（国内クレジット制度 など）の活用による地域活性化。
- ・ 環境と調和した社会資本整備、あるいは自然と親しめる施設の整備。

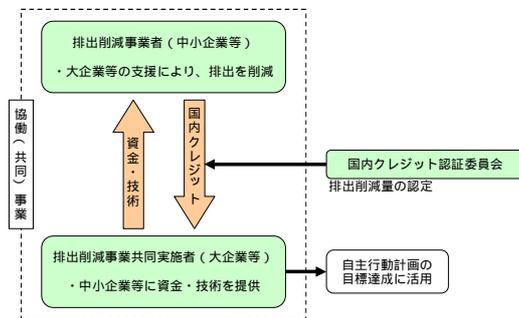
モーダルシフト

…貨物輸送を、トラックからより低公害で効率的な大量輸送方式である海運や鉄道に転換することにより、二酸化炭素排出量削減等の環境負荷の軽減を図ることが期待されています。

国内クレジット制度

…国内クレジット制度は、二酸化炭素排出量取引の一つです。

大企業等の技術・資金等を提供して中小企業等が実現した二酸化炭素排出削減量を認証し、大企業の自主行動計画等の目標達成のために活用できるようになっています。これを活用することで、中小企業は、大企業から技術や資金の提供を受けることが可能となります。また、中小企業以外にも農林業なども対象となることから、森林の保全活動などへの利用も考えられます。



自然・人材・技術の連携による世界に誇る中海ブランドの創出
～ なかうみで創る～

課題・事業

圏域内の技術、ノウハウ、産品等の連携による新産業の創出

- ・ 島根大学や鳥取大学医学部、松江市工業高等専門学校・米子工業高等専門学校などの高等教育機関と民間・行政との連携による産業の支援と創出。
- ・ 中海圏域の多様な自然をフィールドとして活用した新技術開発。
- ・ 米子・境港エリアで実施された食品加工技術に関する産学官連携事業の経験を活かした機能性食品などの開発。
- ・ 各市町の一次産品と氷温技術などの食品加工技術の連携による新製品の開発。
- ・ Rubyなどの情報技術と特産品、圏域固有の技術・ノウハウの連携による競争力の高い製品・サービスの開発。
- ・ ボタン栽培などの圏域固有の技術を活かした競争力の高い製品の流通・販路拡大
- ・ たたら技術から続く「ヤスキハガネ」の技術を活かした表面改質や材料評価など新技術の開発。

人材の誘致・育成・確保

- ・ 中海圏域の特徴的な技術・ノウハウを活かした有能な人材の国内外からの招致。
- ・ 島根大学など圏域内の高等教育機関と地元企業の連携による人材の育成と確保。
- ・ UIJ ターンの促進。
- ・ 企業誘致による雇用の場の創出。

個性を活かした観光振興

- ・ 中海四市観光協会会議等との連携により、圏域の地域資源である神話から続く歴史・文化や自然、温泉、美術館などを結んだ“なかうみ観光ゾーン”の形成。
- ・ 中海圏域の課題である観光二次交通の充実。
- ・ 中海圏域にある広域観光連携組織の意見調整や事業内容の整理による効果的な広域観光事業の展開。
- ・ 外国人観光客の受け入れ体制の充実と誘致促進。

水質浄化技術など環境技術の開発と活用

- ・ 宍道湖・中海エリアで実施された水環境修復技術に関する産学官連携事業の経験を活かした中海圏域発の環境技術の開発。
- ・ 海外の水質浄化技術など環境技術を必要とする地域に対し事業展開＝中海圏域発の環境技術の海外展開。圏域の重要産業として成長。

自然を活用した新技術開発

...例えば、島根大学は「汽水域研究センター」を設置し、汽水域に隣接しているという条件を生かし、そこで起こる様々な問題や課題の解決に向けた基礎的研究を推進しています。

食品加工技術に関する産学官連携事業

...平成 18～20 年度に米子・境港エリアにおいて都市エリア産学官連携促進事業「染色体工学技術等による生活習慣病予防食品評価システムの構築と食品等の開発」が実施されました。鳥取大学、鳥取県産業技術センターが核となって行われたもので、今後、この成果を活かし、鳥取大学医学部内に「とっとりバイオフロンティア」を設置することが計画されています。

水環境修復技術に関する産学官連携事業

...平成 14～16 年度に宍道湖・中海エリアにおいて都市エリア産学官連携促進事業「循環型社会形成に向けた産業共生モデル - 水環境修復技術の開発 - 」が実施されました。島根大学、松江工業高等専門学校、島根県産業技術センターが核となって行われたもので、事業終了後には、地物民間企業が「革新的高含水有機性廃棄物の固液一括処理システム」「中・小規模排水処理施設用高性能リン除去・回収装置」などを開発しています。

2. ひとつの基盤を創り上げるために

4市1町がつながり、あたかもひとつのように機能するまち
～なかうみをつなげる～

課題・事業

圏域を支える基盤の充実

- ・全国的にも遅れている高速道路の整備 = 中国地方内の主要都市との連携による地域活性化。
- ・中海周遊道路、中海架橋の整備による圏域内ネットワークの強化。

一体的な都市圏としての気運醸成

- ・中海レガッタなどスポーツイベントを通じた圏域の一体感の醸成。
- ・中海の自然を活かした、水上スポーツ拠点整備、中海一周駅伝・なかうみマラソン、トライアスロン等の開催。
- ・地域共通の資源である神話から続く歴史教育の充実。

情報基盤の整備

- ・各市町の広報、ケーブルテレビなどを活用した情報の共有化。
- ・中海圏域の振興を進めるための参考となる基礎的な統計資料の作成。

圏域内都市間の機能分担、連携・補完の推進

- ・医療福祉施設などの整備と相互連携・補完による安全・安心社会の構築。
- ・圏域内の施設の相互利用など圏域内の都市機能分担による生活利便性の向上。
- ・行政の連携（下水道施設の相互利用など）による生活利便性・安全安心の向上。
- ・消防・救急救命（消防通信指令など）業務の区域を越えた一体的な運用。

第5章 中海市長会が担うべき役割

中海市長会は、その前身であった「中海圏域4市連絡協議会」の連絡調整機関としての時代を経て、平成19年に、従来の連絡調整に「圏域の総合的・一体的な発展の推進を図る」ことをその目的に加え、発展的な改組により設立し今日に至っています。

この間、圏域内交流の促進、圏域の発展に向けた多様な取り組みを進め、中海産業技術展や国際定期航路等の産業・観光振興への支援をはじめ各種イベント・事業への支援、圏域共同の情報発信、圏域イメージキャラクター「ウンパくん」の製作、圏域の将来像策定に向けたシンポジウムの開催などの取り組みを展開してきました。

そして、これら全ての取り組みは、圏域内に暮らす住民の皆様をはじめ、圏域内で活動する団体、事業者の皆様の前向きな参加と実践があったればこそ実現できたものであり、その積み重ねを経て「机上論」ではない実践的な観点からの策定に結びついたものと考えます。

新たな段階を迎える中海市長会の担うべき役割として、次の3つの役割を掲げることとします。

1. 圏域発展を支える「ひとつの基盤」づくり

圏域振興・発展の原動力は同一の圏域としてのまとまり、結びつきにあります。そして、県境や自治体の区域を越えた一体性や連帯感の醸成は、住民生活や産業活動などを支援する行政が担うべき基本的な役割です。

中海市長会は、圏域を構成する住民・団体・事業者が主体的に展開する圏域発展に向けた様々な取り組みを積極的に支援することで、「ひとつの圏域」としての一体性を維持、強化していきます。

本ビジョンで示された「4市1町がつながり、あたかもひとつのように機能するまち～なかうみをつなげる～」基盤づくりの役割を担います。

2. 「三つの方向性」構築に向けたコーディネート

圏域発展に向けた取り組みの主役は圏域内に暮らす住民、活動する団体・事業者です。

中海市長会は、住民やNPO、民間企業、連携組織・団体等に国、県も含めた行政などの各主体が協同・連携して取り組む事業の展開や、課題の解決にあたり、各主体に最も身近な存在としての機能を発揮することで「ひとつの圏域」におけるコーディネートを行ないます。

本ビジョンで示された「圏域発展を牽引する三つの方向性」を構築・実現していくうえでの調整役としての役割を担います。

3 . 圏域の将来像実現に向けた進行管理

圏域の将来像を実現していくためには、圏域内で活動する各主体の取り組みを全体として結びつけ、実現される成果を集約し、一層の圏域発展につないでいく役割が必要です。

中海市長会は、圏域発展に向けあらゆる分野に関わる存在として、本ビジョンの着実な推進、圏域を取り巻く環境変化等を踏まえた進行管理の役割を担います。

中海市長会は、引き続き圏域発展に向けた様々な活動を住民、団体、事業者の皆様とともに積極的に進めてまいります。

本ビジョンが皆様の取り組みの一助となり、皆様とともに創り上げる「出会いは なかうみ 動きだす 未来」の実現に向けて、一層ご理解とお力添えを切に願うものです。

